

議なことに先生は自動車運転はとうとうなさらなかった。或いは、「運転などは車夫馬丁のすること」とお考えだったのかも知れない。ステレオのことは存じあげないが、教室へ来て間もなく、或る土曜の午後、隣の研究室から壁を透して軽快なポピュラーミュージックが流れてきた。どう考えても先生の印象とポピュラー音楽とは両立しなかったから、多分補佐員のI君であろう、と勝手に決めたのだが、この主は何と先生であることが知れた。うかがうと、大変お好きだ、とのこと。この分ではステレオに関してもマニアであるに違いない。

ともあれ、旺盛な好奇心、興味、関心は学問にとっても必須の要件であり、ご退官後もご研究が發展するであろうことを信じて疑わない。不肖な後輩であるけれども、今後も先生の変らぬご指導を賜りたいと願っている。

浅井先生と予稿集

内藤博夫

昭和45年4月から47年3月まで浅井先生は日本地理学会常任委員になられ、集会委員長をつとめられた。私もその際、集会委員を委しよくされ、浅井先生を補佐することになった。集会委員会の主な仕事は年に2回開かれる大会と、ほぼ毎月開かれる例会を準備することである。浅井先生はこの仕事に意欲的にとり組まれた。浅井先生がリーダー・シップをとって行われた改革のなかで、もっとも大きいものと考えられるのは大会発表に関する予稿集の刊行である。例会発表に関してはその要旨が機関誌の地理学評論に掲載されるので会員は事前に発表内容の概略を知ることができる。しかし大会発表に関してはそのような便宜がなく、タイプ印刷の要旨集が大会当日または事前に会員に配布されるにすぎなかった。地理学評論とは別の発表要旨集になると保管の点で不便であるだけでなく、文献としての価値が事実上ゼロに等しくなってしまうという欠点があった。浅井先生は気象学会その他の例を参考にしながら、要旨原稿をそのまま写真製版し、印刷・製本してまとめた文献に仕立てる予稿集の必要性を力説され、これが学会を動かすことになって昭和46年度秋季大会（鹿児島大学にて開催）より刊行をみることになった。

予稿集を刊行する際に不安な点が一つあった。それは、発表時より2カ月余り前にかなりまとまった原稿を提出しなければならないために、発表数が減るのではないかということである。普通、発表要旨として要求される分量は1200字程度が多いが、予稿集の場合は約4500字分が要求されることからいっても、この不安は根拠のあるものだったと思う。それに、学会発表をおこなったことのある人なら大なり小なり経験することであるが、研究活動は発表直前まで続けられているものであり、発表申込時と発表時では内容が多少変ることも生じるので、2カ月前に原稿の提出を求められることが発表者にとってかなりの負担になることは十分予想できた。しかし実際にフタをあけてみると、発表件数は減るどころか、逆に年々増える傾向にある。たとえば予稿集第2号（1972年度春季）の発表件数は123であったのに対し、予稿集第16号（1979年春季）では136件に達した。このような結果をもたらした理由としては次のことが考えられる。第1に学会会員数が増えたこと、第2に予稿集が文

献としての体裁を整えたために、学会発表が単なる口頭発表にとどまらずに、文献の裏付けをもった業績として評価されるようになったことである。事実、最近の論文では予稿集を引用する例が増えてきた。

このように発表者に負担を強いたにもかかわらず発表件数が増えてきたことは、発表会場の確保難という新しい問題を生み出したという事実はあるにしても、予稿集の登場が学会々員の間で研究活動を活発化させる契機となったことを示しており、浅井先生のご努力は見事に実を結んだわけである。その後も順調に刊行されていることからいって、予稿集は日本地理学会の中に深く定着したとみてよいであろう。なお予稿集には大会時の巡検案内も収録されているが、これだけを別刷りにしてポケット版に改造したのも好評をえている。これも浅井先生のアイデアによるものであることを付言しておきたい。

地 理 学 教 室 の ジ ー プ

齋 藤 功

昭和48年私がお茶の水女子大学に転任しておどろかされたことの一つは、地理学教室にジープがあることであった。それは、三菱J 20Cという型のジープで、浅井辰郎教授を代表者とする文部省科学研究費「生産力的研究法による地理・地誌学の実証的研究」の備品の一つとして昭和46年に購入されたとのことである。地理学教室のみでジープを所有しているのは、おそらくお茶の水女子大学が日本の国立大学のなかで最初で最後のことではなからうか。というのは、管理等の点で大学の一学科でジープを購入することの困難さが、いろんな大学のスタッフから指摘されているのを耳にするからである。このような観点からみて本学の地理学科のジープの購入は、日本の地理学会における一大壮挙といっても過言ではないであろう。

私の着任前、ジープは浅海・式両教授によってフィールド調査・野外巡検・学術研究および地理学教室の現在地への学内移転等多様に活用されてきた。私がジープを使い始めた時の走行距離は8,530 Kmであったが、現在36,394 Kmとなっている。この間柴ある1万キロは式教授による富士北麓の地形調査で、2万キロは浅海教授と筆者による戸隠・鬼無里巡検の下見で、3万キロは式教授による修論指導で達成されている。

運転日誌によると、これまで私が全走行距離の $\frac{1}{3}$ 強にあたる13,400 Kmを走破したことになっている。私は学会・学部巡検の下見、大学院巡検および個人的なフィールド調査にこのジープを使用させて頂いた。なかでも、利根川中流部の野菜生産、赤城山北西斜面の土地利用、栃木県高冷地の調査には充分活用させてもらった。また、現在、共同研究を進めているブナ帯の生活文化についてのフィールドワークも険しい山道をもものもしないジープなくては考えられないことだ。その意味で私は、浅井先生の購入されたジープの恩恵を最も多くうけた者の一人といえるだろう。

最近、浅海・式両教授は学務が多忙なことに加え、自家用車を冷房つきの高級車に買い換えられたため、ジープに乗る機会が少くなりつつあるのは残念なことだ。また、ジープの購入に多大の貢献さ